

スペンサーにおける進化論の形成と創発主義への影響

The formation of Evolutionary Theory in Spencer and its Impact on Emergentism

森 秀 樹*
MORI Hideki

Spencer was a contemporary of Mill, Bain, and Lewes, and was a major influence in the formation of their ideas. He saw the concept of evolution as a universal principle, and by applying it to various domains, he attempted to describe these domains in an integrated way. Among other things, he viewed the process of cognition as evolution in its interrelationship with the environment. Such evolutionary epistemology led him to formulate a way of describing science and reality in an evolutionary way. These results would influence later British emergentists such as Morgan and Alexander. In this sense, it can be argued that Spencer played a key role in linking early emergentism with British emergentism.

キーワード：スペンサー，創発主義，進化，進化論的認識論

Key words : H. Spencer, emergentism, evolution, evolutionary epistemology

序章 スペンサーと創発主義

イギリス創発主義者たちはルイスによる「創発的なもの」という概念を受容している¹。そして、創発の概念史的研究はルイスによる「創発的なもの」の起源としてミルの「異結果惹起的法則」を指摘している²。拙論「創発概念の起源(3)」は、ルイスがミルの概念に名前をつけただけでなく、より包括的な概念としていることを明らかにした³。だが、創発主義者には、ミルやルイスといった初期創発主義者だけではなく、進化論もまた大きな影響を及ぼしている。モーガンの著作は文字通り『創発的進化』(1927)であるし、アレクサンダーの『空間・時間・神性』(1920)は、時間・空間からの諸カテゴリーの創発的進化を主題としている。しかしながら、彼らが言及するのは、ダーウィンというよりも、むしろ、スペンサーである。にもかかわらず、創発の概念史的研究はスペンサーからの影響にほとんど注目してこなかった。そこで、本論文においては、スペンサーがどのようにして『総合哲学の体系』に見られるような進化論的な構想を形成するに至ったのかを明らかにすることで、スペンサーの進化論が創発主義に及ぼした影響について考察する⁴。

スペンサーは「進化」を生物の領域に限定せず、物質、生物、心、社会の諸領域にもあてはまる普遍的な原理だとしている(第一章)。このような進化概念の普遍化は心の領域にも適用され、認識もまた進化論的にとらえられるようになる(第二章)。この着想(進化論的認識論)は、実在もまた諸事物の相互関係の中で展開されるものだという形而上学的な帰結をもたらす(第三章)。以上のことに基づいて、スペンサーの思想が創発の概念史に

どのような影響をもたらしたのかを考察する(第四章)。

第一章 「進化」の普遍化

この章においては、進化概念の普遍化という発想がどのようにして生じたのかを明らかにする。

スペンサーは1848年から1853年にかけて『エコノミスト』の編集者であり、著述家としてのキャリアをジャーナリストとして開始している。そして、彼が当初関心をもっていた領域は個人と社会との関係であった。最初の著作『政府の適正領域』(1843)、『社会静学』(1850)はいずれも、個人の自由を擁護し、社会による介入を退ける立場を主張している。例えば、政府の唯一の義務は司法の執行のみであると、個人の自由はただ他者の同様な自由によってしか制限されえないとした。確かに、これらの著作からリバタリアン的な主張を読み取ることは可能であり、それは晩年の著作『個人対政府』(1884)においても変わらない。しかし、だからといって、スペンサーの思想をその主張のみに限定すべきではなく、むしろ、彼の進化論的な思想の一つの現れとしてみなすべきである。その場合、進化を損なう行きすぎた政府による介入を制限し、各個人に自由を保証することで、自生的な秩序を生成させようとしたと解釈することができる。

スペンサーは1842年から1844年にかけて進化論に触れ、1850年にははっきりとした形をとるようになったと回想している(Spencer1904a:vii,295)。彼は自伝の中で1848年に匿名の著者による『創造の自然誌の痕跡』(1844)(以下『痕跡』と表記)を読んだことに触れている(Spencer1904a:269)。この著作は匿名で出版され、

* 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 教授

令和2年10月5日受理

版を重ねたが、後に、ルイスの友人でもあるチェンバーズによるものであることが判明した。この著作は、ラプラスとハーシェルによる「星雲仮説」に基づき、太陽系と地球の生成から始め、無機質から生物が誕生し、それが高等な生物へと「変異 (transmutation)」し、最後に人類が出現したとしている (Chambers: 191)。そして、このような精妙な世界が形成されるためには、神による企図が不可欠だとして、「デザイン論」を主張している。生物の発生や進化は単純なものから高次なものへと単純線的な仕方で行進するとし、現在の生命が多様なのは、スタートした時期が違うせいであるという「並行進化」をとっている。神は同時に多数の種を創造したのではなく、発展という法則を創造することで、被造物の多様性を実現したというのである。著者は「発展 (development)」ないし「進化 (evolution)」を普遍的な現象であるとするので、地質学や化石の発見といった科学上の発見と自然神学とを両立させようとしたのである。この著作は、科学者たちから科学的知見の誤りを厳しく批判されたものの、科学と宗教との対立に不安を感じる風潮などもあり、読書界には好意的に受け入れられ、版を重ねた。

『痕跡』はスペンサーとルイスとを結びつける役割を果たした。ルイスとスペンサーは1850年にチャップマンを介して知り合ったが (Spencer1904a:377f.)、その際に議論したのが「発展仮説」についてであった。スペンサーが『痕跡』での解釈を批判して、それが唯一の解釈だと考えていたルイスを驚かせた (Spencer1904a:348)。このことがきっかけとなって、両者は親交を深めることになる (Ashton: 118)。その後、ルイスはスペンサーによって生物学への関心呼び起こされ、スペンサーはルイスによって哲学や心理学に関心を広げられた (Spencer1904a: 379)。そして、1852年にスペンサーは「発展仮説 (Hypothesis of the Development)」を公表し、ルイスもまた1853年に『『痕跡』の発展仮説』という書評において、『痕跡』について、不完全で形而上学的であり、誤りも含まれているとしながらも、好意的に紹介している (Spencer1853: 513f.)。『痕跡』はスペンサーとルイスとの相互関係を形成するきっかけとなるとともに、「発展仮説」という着想を与えたのである。

ただし、『痕跡』は、それまでの発生学や進化論の流れの中に位置づけて理解する必要がある。グールドは「進化 (evolution)」という語の用法について言及している (Gould: 28ff.)。それによれば、ハラーはこの語を、もともともっていた素因が展開するという前成説的な意味で用いていた。だが、やがて、この語は生物自身の変化を指すようになり、サン＝ティレルは前成説的な意味でも後成説的な意味でも用いている。サン＝ティレルは、ラマルク『動物哲学』(1830)における進化論の信奉者であり、すべての動物は一つの共通したボ

ディ・プランをもっているとして「反復説」(あらゆる動物はその発生においてより原始的な生物の段階を反復する)を主張した。進化という概念は前成説か後成説かという対立の中で議論されていたが、単純線的な進化を主張した『痕跡』は前成説的な立場の中に位置づけられることになる。

ただし、この立場はその後批判を受けることになる。キュヴィエは動物の発生には大まかに4つのボディ・プランがあるとし、発生における「反復説」を否定した。また、彼はよく知られているように進化論に対しては批判的であった。また、発生学に大きな寄与をなしたフォン・ベアもまた反復説に対しては批判的であった。彼は、若いころは宇宙を一つの生命とみなすオーケンの『自然哲学提要』(1802)を学んだが、自然科学者としてはキュヴィエにならって経験と観察に重きを置き、パンダーとならんで胚葉説を唱えた。胚葉説は前成説を退け、後成説を支持するものであった。また、フォン・ベアは発生のあり方によって動物の分類群の分化を考えた。「動物の型ごとに一定の異なる発生様式がある」としている (Von Baer: 225)。彼の『動物発生学』における主要な主張は第三部の「注解と補遺」、特にその五番目の注解において明確に述べられている。それは以下の四つの命題にまとめられるが (Von Baer: 224)、ルイスも書評においてこれらを紹介している。

- 1) 「比較的大きな動物群に共通なものは、特殊なものよりも早く胚において形成される」。
- 2) 「形態関係の最も普遍的なものからそれほど普遍的ではないものが形成される。そのような形成は、最後に特殊なものが現れるまで継続する」。
- 3) 特定の動物の形態の胚は、他の特定の諸形態を経由するわけではなく、むしろそれらとは異なっている。
- 4) より高次な動物の形態の胚と同じなのは、他の動物の形態ではなく、自分の胚のみである。

フォン・ベアは発生においては「同質的なものから異質的なものへと分化」していくとしたが、同書の第一巻の最後の部分では、この分化を自然の「根本思想 (Grundgedanke)」であるとして、それが生物の世界のみならず、宇宙の生成をも統べていると述べている (Von Baer: 263f.)。

フォン・ベアの思想をイギリスで広める役割を果たしたのがカーペンターの『一般及び比較生理学原理』(1851)である。この本の第一巻第八章「有機体の構造と発達の一般的プランについて」は「異質ないしは特殊な構造は、より均質ないしは一般的な構造から生じる。そして、それは漸進的な変化によってなされる」というフォン・ベアの考えを紹介している (Carpenter1851: 170)。カーペンターもまた「進化」という語を後成説的な意味で用いている⁵⁾。

スペンサーは1851年にカーペンターのこの本の1851年版からフォン・ベアについて学び、進化を後成説的な意味で用いている (Spencer1904a: 384)。スペンサーはすでに『社会静学』において社会が均質なあり方から分化したあり方へと進化することを論じていたが、同じ発想が生物の世界にも見られるということに気づいたのである (Spencer1904a: 384f,406)。

スペンサーが『痕跡』から大きな影響を受けたことは間違いない。『痕跡』からは、物質の領域、生物の領域、社会の領域を等しく「進化」ないし「発展」という観点から記述するという発想を学んだ。とはいえ、その全てを受容したわけではない。まず、自然神学的発想は拭い去られている。また、単線進化の発想も受け入れていない。むしろ、フォン・ベアやカーペンターなどによるその後の生物学の変化を受容している。そして、さらに「進化」を特定の領域に限定せず、様々な領域に適用可能な法則として取り扱い、チェンバーズ以上に徹底した見方をしている。例えば、チェンバーズもまたフォン・ベアの「ある同質的で一般的なものから異質的で特殊な構造が生まれる。しかも、このような生成は徐々に生じる変化によるものである」(Chambers,147)という考え方に着目してはいるが、それを生物の領域のみに限定している。それに対して、スペンサーはこの発想をあらゆる領域に適用している。このようにして、スペンサーは独自の「汎進化論」を構想するに至ったのである。

他方で、ルイスもまた『痕跡』と並んで、フォン・ベアからの影響を受け、「フォン・ベアにおける発達仮説」(1853)と『『痕跡』における発達仮説』(1853)といった書評を著している。『『痕跡』における発達仮説』において、ルイスは、『痕跡』が、科学的知見という点では新しいものをもたらしてはならず、従来の知見の域を出ていないとしつつも、ラプラスの「星雲仮説」とラマルクの「進化論」とを「進歩」という観点からとりまとめ、万物は一つの全体を形成して進歩するという考え方を示していると評価している (Lewes1853: 784f.)。そして、ルイスは『痕跡』をラマルクの進化論と対比し、ラマルクが環境からの影響にもっぱら注目し、有機体の自発性を軽視したのに対して、『痕跡』は環境との関係を規定するものに注目したと指摘する。『痕跡』はそれを神による「予め規定されたプラン」としたが、ルイスはこの解釈を誤りだとして、有機体の自発性と解釈した。そして、環境と有機体との相互交渉関係こそが重要であると主張している。以上のようにルイスとスペンサーは相互の交流の中でほぼ同時期に同一のテーマについて考察し、似た発想を発表しているのである。

スペンサーの「発展仮説」は、(神が多様な種をその都度創造しているのであり、種の進化はありえないという)「特殊創造」という考え方よりも(多様な種は徐々

に行われる進化によって生まれるという)「発展仮説」の方が優れていると主張するものであった。これは、一方で、「特殊創造」ではなく、「発展仮説」を主張する『痕跡』を受容するものであると同時に、他方で、その説明が神による創造と関係づけられる必要があるわけではないということを示している(実際、神による創造についての言及はない)。ただし、そのことは宗教的なものを否定することとは限らない。後に触れるように、『第一原理』(1862, 1867²)において「知りえないもの」を考慮することで、宗教的なものとの関わり方を考えようとした。

スペンサーは、「発展」を単なる事実とみなすのではなく、「原理」として考えている。『痕跡』において「発展」は神によるデザインを論証する証拠でしかなかった。「発展」を原理とみなすきっかけはむしろ、フォン・ベアによる「一般的なものから特殊なものが生じる」という考え方の受容にある。これは「後成説」を主張するものであり、分化の要因は環境との関係に求められることになる。「発展仮説」を環境との関係において理解しようとした点にスペンサーの独自性がある。この点において、一つの転機を示していると思われるのが「人口の理論」(1852)である。この論文は、人間のふるまい方が環境によって変化するという点を人口という例を用いて考えようとするものであった。

マルサスは人口は指数関数的に増加すると考えたのに対して、ダブルデイは環境によって増加率に変化があると指摘した。確かに、環境によって出生率や死亡率は変化する。しかし、有機体は環境からの影響を受動的に被るだけの存在ではない。スペンサーは「生命とは諸作用の協調である」とする。つまり、生物の強さや素早さは環境との相関関係で決まり、理性や悟性もまた環境との相互作用の中で決まる。そして、その中で進行する進化によってより複雑な協調ができるようになるとする。さて、種の存続には死亡率と繁殖率という二つの契機の均衡が必要である。繁殖も自己保存もコストがかかるため、自己保存能力と繁殖率は反比例の関係にある。したがって、進化するほど繁殖率が下がることになる。人間の種族においてもより進化したものほど人口の増加率は下がる⁶。スペンサーはすでに1852年の時点で、このことは人間の場合にのみあてはまるものではなく、生物一般にあてはまると考えていた (Spencer1904a: 389)。

また、スペンサーはその後「進歩：その法則と原因」を発表している。彼は、フォン・ベアにならって、進歩(進化)について「有機的な進歩は同質なものから異質的なものへの変化のうちにある」という定式化を行っている。例えば、星雲の場合、構成物質が同質的であっても、場所は同一ではない。そのような差異によって分化が始まる。そして、最初の分化によって、帰結の

差異が生じ、それがさらなる分化を推進することになる (Spencer1858: 10)。さしあたり、スペンサーは進化を以下のように説明している。「物質の集中と、これに随伴する、運動の分散である。その際、物質は、非限定的で非凝集的な同質性から、限定的で凝集的な異質性へと変化する」(Spencer1862: 407)。スペンサーによれば、このような変化の全過程は、物質と運動の集中 (concentration) と分散 (diffusion) として、したがって、進化 (evolution) と解体 (dissolution) として記述することができるという (Spencer1862: 555)。そして、その上で、このような仮説は様々な領域 (地球、生命、社会、政府、産業、商業、言語、文化、科学、芸術) に適用可能であると述べている (Spencer1857a: 10)。彼はこの論文において進歩をあらゆる領域に妥当する普遍的な原理として提示している。

スペンサーは、進歩があらゆる領域に妥当する普遍的な原理であるということを示すために、論文「超越論的生理学」(1857) において生理学の領域においてみられる様々な構造が、分化という共通の法則によって発生してきたものであることを示そうとしている。個別に見られる特徴は実は普遍的な現象として考えることができるというのである (Spencer1857b: 70)。ここで「超越論的生理学」とは、個別な構造について論じる生理学ではなく、これらの構造に共通する法則について論じるものとなる。

同質的でいられるのは均衡があるからである。したがって、均衡がないところでは、分化が進まざるをえない (Spencer1857b: 81)。例えば、熱せられた物体は冷えていくが、その際、冷え方は場所によって異なるため、不均衡が生じる (Spencer1857b: 84)。このように同質的なものは異質的なものへとアприオリに分化することになる。また、「器官とそれが生長することとの関係」はあらゆる器官に関わるだけでなく、あらゆる種に関わる。体のサイズが大きくなれば、酸素や影響の供給のために構造が分化しなくてはならない (Spencer1857b: 77)。生長は個々の器官相互の関係性を再調整することを必要とし、それとともに、環境との関わりも変わる (Spencer1857b: 76)。繁殖においても同様である。その結果、いかなる領域においても進化は同質的なものから異質的なものへとという仕方をとることになる。ただし、分化は有機体全体の再組織化をも引き起こす (Spencer1857b: 66f.)。このように分化と統合は並行して進むことになる (Spencer1857b: 71)。例えば、幼虫のときは体節が多いのに対して、成虫になるとそれらが統合され少数になる。そして、このように有機体が複雑になっていくと、より多様な環境に対応できるようになるが、それは環境からの自立性を備えるということの意味する (Spencer1857b: 73)。

この論考が書かれたのは、ダーウィンの『種の起源』(1859) が出版される前であったが、スペンサーは遺伝の問題についても言及している。当時、遺伝の仕組みは解明されておらず、スペンサーは、ラマルクと同様に、環境の中で分化した諸形質は子孫にも伝えられると考えていた (Spencer1857b: 91f.)。また、発生学では、似たような卵がどのようにしてそれぞれの種に分化していくのかが問題となり、前成説と後成説とが対立していたが、フォン・ベアは受精卵が類似した状態から徐々に分化していくことから後成説を主張していた。現代では、遺伝子によって分化の基本的なあり方は決定されているものの、分化の具体的な進行は環境との相互作用の中で行われることが知られている。遺伝子は環境との関係の中で初めて表現型として発現することができる。現代の進化論的発生学はこのような相互作用を研究している。また、遺伝子を経由しない遺伝や文化の伝承も考えることができる。

生理学が研究してきた諸発見は個別の研究からの帰納によって得られたが、その法則の背後にはこのようなアприオリな原理があるということになる。そして、有機体の置かれた条件からアприオリに決まる形態というものがあるということになる (Spencer1857b: 79f.)。スペンサーは「所与 (data)」からそのようなことが可能になるためのアприオリな原理を考えようとしている。「総合哲学」のすべての領域で共通する方法論がえられたことになる (Spencer1857b: 66)。

このような分化と再組織化が必然的であるという着想は、真理について新たな光をあてることになる。19世紀の前半において、ミル、ハーシェル、ヒューウェルによって、帰納により発見された真理を演繹的な体系へともたらすという科学論が構想されていたが、ミルは経験論に依拠するあまり、アприオリな真理に対して批判的であった。これに対して、スペンサーは、帰納的方法に加えて、その条件を考える演繹法を取り入れ、さらに、複雑系のあり方を考える社会学的方法も取り入れた (Spencer1857b: 107)。ここでいわれている社会学的方法とは有機体を社会との比較において考えるという方法であるが、それは社会学的方法を生物学に導入するというわけではない。有機体も社会もまた環境を含む全体性によって規定されるが故に有機体を分析する際に社会との類比が成立するということである (Spencer1857b: 101, 104f., 107)。また逆に、社会の領域においても物理学や生物学に類比的な現象が見られるということでもある。

まず、分化において、どんな異質的なものになるのかは前もってはわからないため、分化はカオス的なあり方をするということになる (Spencer1857b: 84)。進化の前後において、機械論的な因果関係は不可能で、複雑な因果

関係になる (Spencer1857b:100)。その意味では、前もつての予測は困難である。しかし、分化に引き続く再組織化は、自生的な秩序を生み出す。そのことによって、「法則」が産出され、それに支配される現象についての予測が可能となる。このようにして形成された領域において、分化する構成要素は環境と一緒に全体をつくる (Spencer1857b:93)。そして、部分は全体によって規定されているため、恣意的に一箇所だけを変更することはできない。そうだとすれば、他様に考えることのできないものは真であるとみなしてよいことになる (Spencer1857b: 96)。確かに、一方において、あらゆる状況を貫くような真理に到達することはできない。そもそも、あらゆる法則は未だ産出されつくしてはいない。しかし、他方において、局所において成立するような、ある程度安定的な秩序は存在し、それについて真理を語るができる。そして、この着想は進化論的認識論に至るような論考の基礎となっていく。「超越論的生理学」は、それまでの社会についての論考を生理学についての研究と結びつけることで、後の「総合哲学」に至るビジョンを切り開いたという意味で一つの到達点を示している。

以上のような諸論文において考えられてきた分化と再統合のあり方を生物学の領域で集大成したのが『生物学原理』(1867)である。生物の発生において、生物と環境とは相互に呼応し合う関係を作り出すに至った。諸生物はそれぞれの仕方では世界と呼応しあう。そして、その事実の中には、環境と生物との相互のやりとりのプロセスが暗黙の内に刻み込まれている。生物の知覚は環境と呼応しあう生物のあり方を反映したものである。その意味で、心はこの呼応関係そのものを対象化し、認知することである。すなわち、環境における対象の認知と認知対象との相関は、実は生物をとりまく環境との関係の認知なのである。そして、それはさらにこのような関係に至ったプロセスの認知でもある。このことによって、生物は、各々の位置する局所的な場所に留まりながらも、それをとりまく環境全体に関わるようなあり方について試行錯誤を行い、それとの間に持続的な関係を構築することができるようになる。しかも、そのような試行錯誤は偶然に任させるだけではなく。進化とは、偶然に任されながらも、世代を重ねる中で蓄積されていった適応の関係であるが、環境や歴史の認知はこのような適応の関係の形成を個体の中で省察し、シミュレーションすることを可能にするからである。だが、このような認知し、記憶し、予測する生物の出現によって、環境はより複雑なものとなることになる。その中から、社会的なものが芽生え、さらには、他者を配慮するという利他性もまた出現することになった。スペンサーの『総合哲学の体系』はこれらの課題を考察しようとする

ものであった。

第二章 進化論的認識論の形成

1857年の「超越論的生理学」に先立つ1853年にスペンサーは「普遍的要請」という論考を発表している。スペンサーはこの論考で「否定しえないことは真理とみなしてよい」という命題を「普遍的要請」として主張している。この論考はやがて『心理学原理』の「一般的分析」に取り込まれる。このセクションは、人間は主観的な経験から出発しつつも、客観的な真理に到達することができるかという問題を取り扱っている。

スペンサーは、1853年にミルの『論理学の体系』を読み、それに対する批判からこの論考の構想をえたと自伝の中で述べている (Spencer1904a:416)。ミルは経験論の立場からこのような考え方には反対している。しかし、そうすると、科学は常に暫定的なものにとどまってしまうことになる。それに対して、スペンサーは「否定しえない」というテストが誤ることはあるにしても、それを正しく行なうならば、「普遍的要請」に問題はないと主張し、科学を基礎づけようとした。この論考で行われている議論を見る限り、この問いは、カントによる超越論哲学と同様に、経験論と観念論とを調停しようとする形而上学的な議論であるように思われる。

この「普遍的要請」に基づいて、人間の認識の妥当性を実証しようとして構想されたのが『心理学原理』である。この著作は、連合心理学の枠組みの中を動いていると同時に進化の考え方も取り入れているが、両者の関係は必ずしも自明というわけではない。そのため、スペンサー自身がこの著作を第二版において大幅に書き改めている。また、この改訂の過程において、スペンサーは『総合哲学の体系』の構想を獲得し、その概略を1860年に公表している。それによれば、『心理学原理』はその第三編に位置づけられることになっているが、その目次は第一版のものではなく、1872年になってやっと出版されることになる第二版のものが示されている。『心理学原理』の改訂は1855年の直後から開始され、その構想はすでに1860年にはある程度まで完成されていたということになる。このような経緯を考慮に入れると、「普遍的要請」は、当初は連合心理学や当時の科学論との関係の中で構想されたが、進化の普遍化という観点との関係では未だ十分に検討されておらず、スペンサーは1860年までの試行錯誤の中でこの論点を意識するようになっていたと考えることができる。

『心理学原理』第一版(1855)は「一般的分析」に始まり、「特殊的分析」、「一般的総合」、「特殊的総合」が並列されている。第一版の「一般的分析」の中心をなしているのは「普遍的要請」であり、それは「否定しえないことを真理とみなすべし」と主張している。この「要

請」はそれ以下の具体的な記述の真理性を保証しようとするものであった。このように『心理学原理』の第一版は連合心理学の体系に依拠して、心理学による真理論や感覚によって知性がどのようにして構成されるのかといった認識論的な問題を論じていた。そして、この着想が経験論の発想に基づく科学論の基礎となっている。しかし、先行する構造と環境が基盤となって機能が分化していくという仕方での構造の進化について、第一版においては十分に論じられていない。

このような『心理学原理』（第一版）の改訂に向かわせた要因として二つの出来事を指摘することができる。一つ目はペインによる『感性と知性』（1855）の出版であり、二つ目はルイスによる『心理学原理』第一版に対する書評（1855）である。

スペンサーが『心理学原理』（第一版）を出版したのと同じ年にペインは『感性と知性』を出版している。スペンサーは自著の出版直後にペインの著作を読み、刺激を受ける。そして、ペインのもう一つの主著『情動と意志』（1859）が出版されると、それについての書評「ペイン『情動と意志』について」（1860）を発表し、やがて、この書評を『心理学原理』第二版に取り込んでいる。

『感性と知性』は心（Feeling）、意志（Will, Volition）、思考（Thought）からなるとしている。伝統的な哲学や内省的心理学では、思考が心の中心であるとされたが、ペインは、心の働きの基盤となるのは、感覚（Sensation）や情動（Emotion）を含む感じ（Feeling）であるとした（Bain1855: 1）。神経系で様々な出来事が生じるのに合わせて、心の中では様々な感じが同時的あるいは継時的に生成する。五感からの刺激は感覚を、身体の活動は筋肉の感じを引き起こし、それがさらに新しい感じを引き起こしていく。ペインはこのような状態を「意識の流れ（stream of consciousness）」と表現している（Bain1855:359）。

「意識の流れ」における様々な感じの生起は意志や思考といった他の心の働きの起源となる。ペインは知性の発生について四つの法則に言及している。1) 「近接（contiguity）」において現れるものは「連合」し、観念を形成する（Bain1855: The Intellect, Chap.1）。2) 心には類似した過去の経験を再生する傾向がある（Bain1855: The Intellect, Chap.2）。3) 近接や類似によって連合しているものはそれらが重複するほど再生されやすくなる（Bain1855: The Intellect, Chap.3）。4) 心は連合に基づいて、新しい結合を想像することができる（Bain1855: The Intellect, Chap.4）。これらの法則によって、知覚や想像が成立することになる。

『情動と意志』は意志の原初形態を、「運動の自発性（Spontaneity of movement）」と「快不快」との結びつき（link）にあるとしている（Bain1859:327, 343）。ペ

インによれば、意志は最初から存在しているわけではない。そもそも、幼児は無力であり、何を目指すべきかも分かっていない。意志の力の基礎が与えられるのは「筋肉の活動の自発性」によってである。とはいえ、「筋肉の活動の自発性」と呼ばれる現象は神経系によって筋肉の活動が無目的に（aimless）ランダムに引き起こされることでしかなく、意志ではない。だが、ランダムに引き起こされた現象が主体にとって何かの価値（快）を偶然もたらすことがありうる。このような、動きと快との偶然の結びつきはやがて「連合」を形成し、そのような状態を再現しようとするようになる。初めはこの試みは失敗するかもしれないが、何度も反復する中で、筋肉の活動が目的をスムーズに達成するようになる。主体の中に目的を達成する仕組みが形成され、それが習慣化するというのである（Bain1870a:68f., 86）。ペインはこのようにして「意志の成長（growth of the Will）」が生じるとしている（Bain1870a:109,323, 332）⁷。心が自発性をもつわけではなく、むしろ、イニシアティブを取るのは神経系なのである。このように、ペインは生理学的心理学を主張しており、人間に関する科学は最終的には生理学に還元されることになる（Bain1872: 41）。

スペンサーはペインの著作を心理学的知見のデータ「心の自然誌」（Spencer1860a:242）とみなし、そのデータを体系化することが必要だと論じている。そして、それを自身で実行しようとしている。スペンサーはペインのように諸現象を列挙するにとどまらず、それらの間の発展過程に注目する。すなわち、『心理学原理』第二版では、冒頭に置かれていた「一般的分析」が最後の結論部に移し置かれている。そして、心と環境との対応関係を論じる「一般的分析」に基づいて、各自の生と外界との関係から心がいかにして発生するかを論じる「特殊的分析」や、生命の進化にともなって、身体的生から心的生がどのように分化しているかを論じる「特殊的総合」が配置されるとともに、意識と神経の相関関係を論じる「生理学的総合」が増補された上で、認識を担う知性がどのようにして心理的に構成されるのかを論じる「一般的分析」が結論として置かれている。このようにして、『心理学原理』の第二版は様々な心理的なものから知性的なものが構成されるプロセスを記述するようになっている。ペインの二つの著作がスペンサーの心理学の変容の一つのきっかけとなったのである。

ペインと並んで、この時期のスペンサーに大きな役割を果たしたのがルイスである。ルイスは『心理学原理』が出版されるとただちに、書評を執筆している（Lewes1855）。そこで、ルイスはシュヴァンの細胞説に言及している。あらゆる生物が細胞からできているということは、あらゆる機能は細胞の分化と構成によって行

われるということの意味する。そして、その本質は「構成の統一 (Unity of Composition)」つまり、構成要素の相互作用にある。これと同様なことを心理学の領域で行ったのがスペンサーであると指摘している。生物学の進化論的な原理を心理学に適用しているというのである。彼は、心を構成要素に分割するのではなく、原初的なものがどのように相互関係を結んでいるのかに注目したとしている。そして、さらに、心の作用に関係づけに求めている。あるものを知るとは他のものとの関係の内に見ることなのである。

ルイスは、『心理学原理』の第一部「一般的分析」(「普遍的要請」を含む)、第二部「特殊的分析」で展開される議論は一般には興味をもたれないとしている。むしろ、第三部「一般的総合」(心と生命との統合)と第四部「特殊的総合」(心の諸機能)を前に配置すべきだったと指摘している。また、第四部において、知性は生命活動の発達の上に成り立っているとされているが、これについて、ルイスは「スペンサーは、生命と知性の様々な形態の生成を示した。ちょうど、単純で同質的な組織からより一層特殊で複雑な構造が発達してくるように、形態は徐々に複雑になっていく。そして、単純な反射的行動から、自動的で本能的な行動を経由して、意志的な行動へと至る。生命と心の多層的な現れが一つの一般化のもとに統合されている。……一つの法則が全体を統べている。一つのプロセスが限りない多様性の中に見られる」とまとめている (Lewes1855:1013)。

スペンサーはこのようなルイスによる総括を適切なものとみなす。そして、第二版においてこの構成を受け入れ、生理学と心理学を一つの原理 (=生命の原理) によって説明しようとしている。第二版は、環境の中でどのようにして感覚が発生してきたのか、また、個体における心理的なものがどのような進化をとげていくのか、さらに、心そのものが社会の中でどのような役割を果たすようになっていくのかといった心の進化について論じるようになっていっているのである。すなわち、第二版は、第一版と同様に連合心理学に基づきながらも、経験論的な認識論をこえて、生理学から出発する進化心理学を展開しようとしている点にその特色がある (Spencer1872:13)。認識論の背後には心の進化が隠されているというのである。

このように、第一版から第二版に至る配列の逆転は大きな意味をもっている。すなわち、生理学や心理学の記述を行うとされていた知性そのものが当の生理学や心理学における進歩に依拠しているのであり、生物の進化にともなって生じた心の進化が人間の認知を可能にし、真理の世界を構成しているという発想が明確になっている。その上で、第二版は、生理学的な分析のみならず、社会的な分析にも取り組んでいる。第八部第五章「社

会性と共感」において、彼は社会における感情の(利己性から利他性への)進化について論じている。環境の中で社会性が発見され、それが遺伝していく (Spencer1872:560)。そして、生存のために協力した方がよい場合、動物は社会性や社交性 (gregariousness) といった利他的センチメントを進化させる (§ 524-525)。この箇所ですべて「最適者生存 (the survive of the fittest)」という表現が用いられている。社会進化論が連合心理学の延長線上に説かれるとともに、認識が社会の中で営まれるものであるということであらわにしている。スペンサーは、ペインの著作とルイスの書評をきっかけとして、この対立を進化という観点から乗り越える観点を見いだしたのである。ここにスペンサーの思想の独自性を見て取ることができる。

以上のような『心理学原理』の改訂作業がもととなって、彼の主著『総合哲学の体系』が目に見えるようになる。『心理学原理』第二版は「総合哲学」の第三編として再構成されることになり、有機的なものからの心理的なものの生成を取り扱うようになる。その方向性はルイスによって指摘されていたものであった。ここからも、この根本的な着想が、スペンサーとルイスとの相互影響関係の中で練り上げられていったということを見て取ることができる。ルイスは上記の書評の中で、スペンサーの着想が「近年の生理学や心理学における業績の成果」であることを指摘し、思想そのものもこのような発達のプロセスの中で生じる創発であることに言及している。そして、創発においては、それまで見えなかったものが、見えるようになるとしている。このようにして、スペンサーは連合心理学の発想から進化論的心理学へと舵を切ることになる (Spencer1872:419)。

第三章 「知りえないもの」との関係による形而上的経験

スペンサーの『総合哲学の体系』は、認識論の形成にとどまるものではなく、さらに、19世紀の自然科学の隆盛による形而上学的なものの危機に対応しようとする目的をもっていた。この章においてはそのことを明らかにすることを試みる。

ミルは「ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討」(1865)においてハミルトンを批判しつつ、経験論的な立場を堅持している。ハミルトンは、カントの影響を受け、認識における形式や観念を認めることで、認識の必然性を認めようとした。これに対して、ミルはこのような立場を観念論として批判している。必然的な判断ですら、あくまでも経験によって形成されたものであり、それが経験に先立つと考えることは矛盾にほかならないと考えるからである。この論考の中で、ミルはスペンサーもまたハミルトンのような立場をとっているとし

て批判している。これに対して、スペンサーは自身が観念論ではないということを示すために、「ミル対ハミルトン」(1865)を執筆した。そして、スペンサーはこの論考において、ミルとハミルトンにおける必然性の考え方を対比しながらも、両者の差異は見かけほど大きなものではないとし、経験論という枠さえ認めれば、ハミルトンのように考えてかまわないとしている。確かに、ミルのいうように、経験論の立場からは不可知なものが残るが、経験的な領域においては不可疑的なものについては真理性を認めてもよいと主張し、ミルとハミルトンとを調停しようとする。

このような連合心理学をめぐるミルとスペンサーとの対立はさしあたり真理をめぐる認識論上の対立として現れている。認識論において、ミルは徹底した経験主義の立場に立ち、経験を超越するような演繹や必然性を拒否する(Mill-VII: 262f.)。これに対して、スペンサーは、経験論の立場に留まりつつも、矛盾律のように不可疑的なものについては一定の必然性を認める。確かに、スペンサーもまたミルと同様にあらゆる認識は経験によって形成されるものであり、それを超えたもの(実在や形而上学的存在)に直接依拠することはできないとしている。しかし、だからといってあらゆる認識が個別的な判断になってしまうわけではない。むしろ、認識は反復される経験によってテストされるのであり、中には、どのような経験をもってしても否定できないような確からしさを備えたものもありうる。これらの間の確からしさを区別をすべきであると主張している(Spencer1855: 19, Spencer1865: 211f.)。

さらに、この議論に「超越論的生理学」におけるアプリアリオリという発想が加わることになる。「否定しえない」という様々な可能性を許容する表現の一つのあり方として、個々の帰納的法則の背後にあって、それらを規定している超越論的法則がクローズアップされるのである。それは、有機体が環境と一体的な秩序を形成するというシステム論的なあり方とも解釈することができる。この観点は、創発を科学論的に位置づける際に重要な視座を提供してくれる。

もともと、ミルの『論理学の体系』はヒューウェル、ハーシェルらによって提案された学問論を社会科学に拡張することを目論むものであった。その中で、ミルは社会環境によって人間のあり方が変容するということを主題化するために「異結果惹起的法則」という概念を導入したのであった。しかし、彼の経験論的立場は真理の位置づけを損なうもののように思われる。

これに対して、スペンサーは、社会と人間との関係を包括するような環境と有機体との関係という観点を普遍化することで、人間の総体的なあり方を自然のこれまでのあり方の歴史の中に位置づけ、科学の営みを自然

主義化する。彼は、科学そのものを、天体、地球、生物、認識能力と同様に、進化するものとして位置づける。1854年の「科学の起源」はこのような着想を示すものであった。そして、彼の主著となる『総合哲学の体系』はこの着想を物理学、生物学、心理学、社会学、倫理学の諸領域において具体化するものであった。

このような認識論上の相違は、経験論に忠実に実在を不可知とするのか、それとも、不可知はあるにしても経験を通して実在に準じるようなものに到達するかという形而上学的な立場をめぐるものであり、経験的な領域において両者の差異を顕在化させるようなものとはいえない。それどころか、ミルとスペンサーは立場の違いにもかかわらず創発性が関わるような領域においては類似した主張を行っている(Mill-VII: 179, Spencer1865: 217)。

以上のような真理をめぐる問題を哲学の中心的課題として位置づけるに至ったのが『第一原理』である。そして、このことはまた「総合哲学」の全体構想にこの問題を関係づけるということの意味している。すなわち、真理をめぐる問題は、すでにミルにおいてそうであったように、単に認識論的な問題であるにとどまらず、不可知なものに対してどのような態度を取るのかという形而上学的な問題であった。当時、近代的な科学が勃興しており、その中で、魂や宗教をどのように位置づけるのかが問題となっていた。ミルが形而上学的なものに対して批判的な立場を取ったのに対して、スペンサーは「知りえないもの」に取り巻かれた状況の中で生きる人間という観点から、形而上学的なものの位置を確保することを試みたのである。

スペンサー自身は、宗教的真理の場を残しておきながらも、科学にコミットすることになる。すなわち、スペンサーは、科学は個別的な発見を蓄積してきたものの、個別科学の体系化は未だ行われていないとし、その役割を果たすのが哲学であると考えた。「科学は部分的に統合された知識であり、哲学は完全に統合された知識である」(Spencer1862:136)。このように考えるならば、総合哲学の体系は諸学問領域を統合する営みであるということになる。スペンサーはこのことを「理想的に完全な哲学は、非知覚的なものから知覚的なものへ、そしてまた、知覚的なものから非知覚的なものへと諸存在者を經由して生じる一連の変化の全体を、別々に、そしてまた全体として定式化するのでなくてはならない」と表現している(Spencer1867a: 541)。かくして、『総合哲学の体系』の基盤におかれる進化とは、一方において、認識の進化(=認識の拡張)であると同時に、認識されるべき世界が認識されるべき構造を備えるに至る過程(=世界の進化)でもあることになる(Spencer1900: 249)。ある形態をとっている存在者もその形態を取るに

至った環境や歴史との関連の内にあるのであり、その関連性を認識しなければ、その存在者を認識したことにならないというのである。すなわち、認識の進化と世界の進化とが相即しあう関係にあり、そのようにしてのみ、実在への接近は成就するというのである。「これまで進化の法則は存在の各々の秩序に関して真なるものとして考察され、別々の秩序としてみなされてきた。しかし、このようにして示されたことから帰納されることは、われわれが存在の諸秩序の一つの自然な全体を形成するものとして考察することによってえられるであろう完全性には及ばない」(Spencer1900: 490)。実在は、存在者と認識者を包括する環境と歴史の総体として考察せねばならない。

このように認識の発達として科学を位置づけることは当然、科学論の位置づけに影響を及ぼすことになる。スペンサーは、進化論の立場から、生物(人間)は(自分のあるいは先祖の)経験の中で、単なる経験を超越するような認識を形成することができるようになっていくと考えた(Mill-VII: 263, Spencer1865: 213, Spencer1896b: 473)。このような考え方に基づくならば、科学は先人たちがそれぞれの環境の中で形成してきた観念連合の体系であり、それらの環境の中でうまくいく方法を蓄積してきたものである。

このような発想はミルの経験主義的科学論に反するものではない。なるほど、ミルは経験主義の立場を堅持し、帰納法に基づいた科学の体系化を試みた(Spencer1855: 18)。この点で、不可疑的なものであっても真とみなすことができるとするスペンサーとは立場が異なっているように見える。しかし、ミルの科学論は環境の中で対象となる現象のあり方が変化するような事例(歴史学や社会学)を包括しようとするものであった。科学の営みすら状況との関係の中でみなくてはならないという発想はスペンサーにも共通するものである。

第四章 スペンサーと創発主義者の関係

この章においては、スペンサーによる進化論の発想がその後の創発主義にどのような寄与をなしたのかを考察する。

(1) ルイスにおける創発

ルイスは『生命と心の諸問題』(1875)で哲学の規則を15個列挙している。その第九規則は「要素の性質を、それらが属している集合の性質から結論づけることはできない。逆も然り」というもので、この箇所、「創発的(emergent)」と「合成的(resultant)」とが対比的に用いられている(Lewes1875a: 98)。ルイスによるこの「創発的なもの」の定義は後の創発主義者によって受容されることになった。その意味で、ルイスは初期創発主義者の中でも創発主義者への橋渡しの役割を果たし

ている。

ただし、この定義そのものだけを見ると、ミルにおける「異結果惹起的法則」の場合と同様に、要素の関係のみによって創発が生じるかのように思われる。また、創発の概念史研究においてもそのように解釈される傾向があった。しかし、ルイスにおける創発の実質はこの定義に尽くされない。というのも、創発と合成との対比がその後の彼の進化論的な分析において大きな役割を果たしているからである(Lewes1875b: 369)。

第二集『心の自然的基礎』(1877)は「有機体を構成する物質的条件」について考察しているが(Lewes1877: v)、そこでは生命や心の領域の基礎となるのが創発的なものであるとされる。まず、ルイスは生命の基盤を「生命形質(Bioplasm)」と呼び、それは物質の「構成(composition)」によって創発するとする。さらに「生命形質」が組み合わせることで有機体が成立する。そして、ルイスは、これにならって、心の基盤を「精神形質(psychoplasm)」と呼び、それは独自の仕方で構成された神経系の振動(tremor)であるとしている。複数の精神形質が組み合わせることで心が成立する(Lewes1875a: 116)。

ルイスは、力(Force)、生命(Life)、心(Mind)という「実在の諸様式(Modes of Existence)」を区別している(Lewes1877: 4)。まず、力の領域にはあらゆる実体の一般的な性質が含まれ、その運動は物理学によって、原子などの結合や分解は化学によって取り扱われる。次に、生命とは「有機的に組織された実体(organized substances)」であり、それを取り扱うのが生物学である。三つ目は「有機的に組織された動物の実体(organised animal substances)」により創発した心という新しい性質であり、心理学や社会学がそれを取り扱う(Lewes1877: 4ff.)。

かくして、ルイスは「化学的現象は新しい、また、生命現象も新しい。しかし、これらの新しさは旧来の物質やエネルギーをある特殊な仕方で組み合わせることにある。同様な仕方で、心的現象は生命現象から、社会的現象は心的現象から創発するところでは、新しい物質を導入するのでも、古い物質を投げ捨てるのでもなく、組み替えが生じている」(Lewes1875a: 189)と述べるに至る。下位の階層の特別な組み合わせが新しい性質を創発するというのである(Lewes1875a: 190)。そして、彼は「精神症(neurosis)」、「精神病(psychosis)」といった概念に言及しながら(Lewes1877: 26)、物質、生命、心の層は相互に独立しており、要素の理解によってはその統合を理解することはできないとしている。これは唯物論に対する批判となっている。

さらに、ルイスは、心が環境との相互作用の中で変容するものであることを指摘している。ルイスは心

の基盤は「組織化された動物的実体 (organized animal substances)」にあるとし、それが感覚 (Sensibility)、情動 (Emotion)、認知 (Cognition) といった働きを行うと考えている (Lewes1877: 5, Lewes1879b: 366)。例えば、ルイスは感覚の創発を以下のように説明している (Lewes1879b: 39ff)。神経系は部分相互の間で相互に関連しあった一つの全体をなしている。そのため、感覚器官への刺激はその全体へ「放散 (irradiation)」することになる。だが、刺激が反復される中で、神経系の中で反応の「集合化 (grouping)」や「協働 (co-ordination)」が生じ、刺激に対する一連の反応を引き起こす通路 (path) が形成されるようになる (「制限 (restriction)」)。結局、刺激の「放散」は、知覚や運動といった最終的な反応の惹起 (discharge) へと収斂 (converge) することになる。このようにして、環境の中での試行錯誤を通して、生理学的な出来事と心理学的な出来事とが合致するような仕組みが形成されるというのである (Lewes1879b: 40)。

また、第三篇『心理学の研究』(1879) はルイスの草稿に基づいて死後に出版されたが、心が社会やその歴史によって変化するということを主題化している。ルイスは、一方において、ペインを連合心理学を大成したとみなし、その発想を受容しているが (Lewes1879b: 124)、他方において、この発想を心の領域のみならず、生命や社会の領域へも応用している。新しい秩序の創発は心の領域だけではなく、物質、生命、社会といった様々な領域でも、同様に発生しているというのである。しかも、そこでは領域を横断するような相互作用が想定されている。既に見たように、ルイスは生物を環境との相互作用を行いつつ、同一性を維持するものとして考えていた。例えば、生物は、それを構成する物質が有機的に組織されたものであり、環境の変化に応じて、自己保存を行っている。有機的な組織が破壊されてしまえば、個体としての生物は存在しえなくなるし、また逆に、個体としての生物が環境の中で食物を発見できなければ、有機体としての組織が崩壊してしまうことになる (Lewes1877: 9)。

ルイスは、スペンサーにならって、知の領域を、「知られるもの (the Known)」、「可知的なもの (the Knowable)」、「不可知的なもの (the Unknowable)」（可知化しえないもの）の三つに分けている (Lewes1875a: 29f., 40)。そして、科学は「知られるもの」（経験的知識）に基づいて「可知的なもの」（体系的知識）を形成していく。それに対して、「不可知的なもの」の領域については宗教や形而上学が思弁を展開してきたが、これらは科学によって否定されようとしている。だが、ルイスは「可知的なもの」の領域に直接もたらしえない、空間、時間、力、運動、原因、魂といった「不可知的なもの」

についても「可知的なもの」に基づいてある程度確かなことをいいうると考える (Lewes1875b: 41ff)。そして、彼がその際に依拠しようとするのが、これらのアприオリなものが想定されねばならない状況であり、その状況の中での生成である (Lewes1875b: 47)。彼はそれを以上のような進化論的認識論の基礎の上に遂行し、「超経験的なもの (the Metempirical)」についての思索を展開しようとする (Lewes1875a: 17f.)。

このようにルイスは「生命」や「精神」といった諸領域における要素を環境との相互作用の中で考察している。ルイスは、〈創発〉は内的な「配置」だけではなく、環境や歴史によっても規定されると主張するのである。

(2) スペンサーとルイス

ルイスの「創発」概念は、要素の組み合わせによって新しい性質が生じるという形式的な規定にとどまるものではなく、物質から社会に至る諸性質がそれぞれの環境との関係の中で生成するという実質的な内容を含むものであった。そして、この実質的な内容の形成においては、ルイスとスペンサーとの相互交渉関係が中心的な役割を果たしている。

まず、第一章において見たように、スペンサーはルイスとの対話の中で「発展仮説」の着想を発展させた。それは、諸要素はそれを取り巻く環境との関係の中で分化し、新しい性質を生み出していくという原理があらゆる領域にあてはまるという仮説であった。ルイスもまた、スペンサーとの対話を通して、単純なものから複雑なものへの進化という観点からあらゆる領域における進化をとらえることができるという発想を育ててきた。このような対話の集大成としてルイスは『生命と心の問題』を執筆している。スペンサーは『心理学原理』で心を環境や歴史との関連の中で考察しているが、ルイスは、その発想を受容して、意識を社会との関係の中で考察している。人間は同じでも環境が変わればふるまい方が異なるのだとすれば、そのふるまい方は、単なる原因の合成によって決まるのではない「創発的なもの」ということになる。スペンサーが「分化」と「統合」と表現した出来事を、ルイスは「放散」と「収斂」という仕方で表現し直しており、両者の間に対応関係を見いだすことができる (Lewes1875b: 171, Lewes1879b: 177)。

また、ルイスは有機体が環境によってふるまい方を変えるという知見を社会にも適用しようとしているが、この発想もスペンサーを受け継いだものである。さらに、認識とは有機体が環境との相互交渉関係の中で発見してきた絡み合いに基づくものであり、経験に先立つ枠組みをなす。ミルがアприオリ派とアポストオリ派の対立として表現したものを、スペンサーは心理発生的な (psychogenetical) 仕方で媒介しようとしたことをルイスは指摘している。「スペンサーは [必然性といった] 様

相の存在を認めているだけではなく、それらがどのようにして生まれてきたのかを説明している。人類の一連の経験が秩序だった傾向性となり、遺産として伝えられているということを示すことによって、空間・時間・因果性などといったアприオリな形式は、経験の中で生じるものであっても、外界との関係の一貫性と普遍性によって、必然的に生得的なものだということを示している(Lewes1875a: 245)。このように考えることによって、ルイスは、直接に経験されえない「不可知的なもの」であっても、哲学の対象とすることができると考えたが、これもスペンサーが『総合哲学の体系』において最終的に主張したテーゼに対応している。

このような影響関係はルイス自身の証言からも裏付けることができる。例えば、ルイス自身が、スペンサーによる諸観念の「生成」について言及し、それが「創発的意識」の「生成」を説明するものとしている(Lewes1875a: 245)。そして、スペンサーが生理学的な発達や社会の発達において並行的なあり方を見ていることに言及している。さらに、ルイスはスペンサーの考え方を「生氣論者(vitalist)」に対抗しうるものとして示している(Lewes1877:69f.)。「有機体はその力を拡張するのは経験の有機化によってである。ハーバード・スペンサー氏はこのような生命と心の進化を素晴らしい叙述によって説明しており、私はただ彼の著作を参照すればよいだけである」(Lewes1879b: 104)。また、ルイスはスペンサーがイギリスの哲学的思考を総合する役割を果たしたとしている(Lewes1875a: 84, Lewes1877: 4)。

前節において見たように、ルイスの創発概念は、要素の組み合わせによって新しい性質が生じるという形式的な規定にとどまるものではなく、物質から社会に至る諸性質がそれぞれの環境との関係の中で生成するという実質的な内容を含むものであった。このことはこれまでの概念史研究では見過ごされてきた点である。そして、さらに、このようなルイスの創発概念の実質的な内容の形成においては、従来の概念史研究によって主張されていたようにミルやバインのような初期創発主義者が関わっていただけではなく、第一章において見てきたように、ルイスとスペンサーとの相互影響関係が中心的な役割を果たしたのである。

(3) モーガンにおけるスペンサーの受容

スペンサーは初期創発主義者と密接に関連していただけではない。彼はミルやルイスとともに創発主義者の一つの源泉ともなった。イギリス創発主義の代表者としては、アレクサンダー、ホールデン、モーガン、ブロードの名前が挙げられることが多いが(Stephan: 25)、いずれもがスペンサーからの影響を受けている。ここではモーガンとアレクサンダーについて見ておく。

モーガンは『自然の解釈』(1905)において新しい性質の創発について述べており、創発主義を主張していた。彼は『創発的進化』(1827)において、創発概念を、ミルの「異結果惹起的法則」に由来し、ルイスによって受け継がれたものであることを指摘している(Morgan1905: 59, Morgan1927: 2f., Morgan1932: 253)。しかるに、ルイスの思想形成においてスペンサーは大きな影響を及ぼしていた。スペンサーはルイスを介してモーガンに影響していると考えられる。それだけではなく、モーガンは「スペンサーの科学哲学」(1913)という著作を著している。その中で、彼はスペンサーの「進歩：その法則と原因」を読み、そこから、「同質的なものから異質的なものへ」という図式を受け取っている(Morgan1913: 4)。そして、機械論が作用と結果を一对一で考えるのに対して、作用は複合的な結果をもたらすことを学んでいる。また、このスペンサーの図式はあらゆる領域に妥当するものであった。「スペンサーの解釈は包括的である。すなわち、生物学、心理学、社会学、倫理は大まかにいって進化という大きな機械的物語の後半の場面の出来事と関係づけられている」(Morgan1913: 9)。その上で、それを(物理・化学型、生命型、認知型)三つの種類に分類している(Morgan1913: 38f.)。

新しい関係性が創発することによって、新しい科学的対象が生じる。そして、それを認知できるような関係性が生じることで、科学的発見が行われる。「科学的研究の経験的な結論に立ち戻ることによろ。私の考えるところでは、新たに構成された性質が創発するのは、新たな様態ないし種類の関係性が起こり、引き続いて新しい産物が進化的総合において形成されるときである。このことは、今や広く創造的進化と呼ばれているものを受け入れることを含意している」(Morgan1913: 19)。モーガンはスペンサーの科学論と創発とを結びつけ、スペンサーを初期創発主義者の中に組み込んでいる(Morgan1913: 30)。さらに、それはスペンサーの中にも読み取れるとしている(Morgan1913: 33)。科学は関係性を発見し、認知できるようにするが、そのようにすることによって、その関係性は人間の作用の系列に組み込まれることになる(Morgan1913: 45)。

(4) アレクサンダーにおけるスペンサーの受容

アレクサンダーはイギリス創発主義の代表者とみなすことができる。彼は主著『空間、時間、神性』(1920)において〈時間-空間〉という最も単純なものから、相互関係の中で、論理的な諸カテゴリー、物質、身体、心、価値が生成していくということを記述している(Alexander: 45)。まず、均質で単純なものから、複雑で分化したものが生成し、さらにそれらの相互作用の中で、そのような分化が進行しつつも、カオスに陥るこ

となく、秩序が形成されるという考え方は、スペンサーやルイスの発想を受け継いだものである。そして、彼は何らかの实在から別の秩序が生じることを創発と呼び、まず、物質から生命が、そして、生理学的なものから精神的なものが生じることを創発の名のもとに分析している (Alexander: 5, 14)。アレクサンダーはこの概念をルイスとモーガンから受け継いだと述べている (Alexander: 14)。それだけではなく、アレクサンダーは社会を個人の集まりから創発するものであるとみなし、個人と社会の関係をスペンサーの社会有機体説に依拠して説明している。さらにアレクサンダーは神性に至る諸価値の創発も論じているが、認識におけるカテゴリーや価値が進化の歴史に依拠していることを論じており (Alexander: 236)、スペンサーの名前に言及している (Alexander: 284, 333)。宇宙の現れ方自体が進化と密接に関連しているという進化論的認識論の着想が受け継がれている。その上で、アレクサンダーはこのような進化の全体像の理念を神性 (Deity) という仕方で主題化している (Alexander: 347f)。スペンサーは科学によるアプローチによって出えられる「知りえないもの」を主題化しようとしたが、アレクサンダーは神性という仕方でこの発想法を受け継いでいるといえる (Alexander: 348)。

スペンサーは、ミル、バイン、ルイスらの同時代人であり、彼らの思想形成に大きな影響を及ぼした。彼は進化概念を普遍的な原理とみなして、様々な領域に適用することで、それらの領域を統合的に記述することを試みた。中でも、認識を環境と生物との相互関係の中での進化としてとらえることで、科学や实在を進化論的な仕方で記述するという方法を形成するに至った。これらの成果は、モーガンやアレクサンダーといった後の創発主義者に影響を及ぼすことになった。このような意味で、スペンサーは初期創発主義と創発主義とを結びつける要の役割を果たしたといえる。

文献表

Alexander, Samuel, *Space, Time, and Deity*, 1920, 1966.
 Ashton, Rosemary, *G.H.Lewis: an unconventional Victorian*, 1991.
 Bain, Alexander, *The Sense and the Intellectual*, 1855.
 — *The Emotions and the Will*, 1859.
 — *Mental Science*, 1870a.
 — *Logic, part.1*, 1870b.
 — *Logic, part.2*, 1870c.
 — *Mind and Body*, 1872.
 — *Logic, part.2, 2nd. ed.*, 1873.
 — *The Sense and the Intellectual*, 4th. ed., 1894⁴.

— *Autobiography*, 1904.
 Carpenter, William B., *Principles of Physiology, General and Comparative*, 1851.
 Chambers, *Vestiges of the Natural Hisotory of Creation*, 1944.
 Gould, Stephen Jay, *Ontogeny and Phylogeny*, 1977.
 Lamarck, Jen-Baptiste, *Philosophie Zoologique*, Tome 1, Tome 2, 1830.
 Lewes, George Henry, "Von Baer on the Development Hypothesis", *The Leader*, June 25, 1853.
 — "The Development Hypothesis of the 'Vestiges'", *The Leader*, August 13, 1853.
 — "Herbert Spencer's Psychology", *The Leader*, October 20, 1855.
 — *The Problems of Life and Mind, First Series: The Foundations of a Creed, vol.1*, 1875a
 — *The Problems of Life and Mind, First Series: The Foundations of a Creed, vol.2*, 1875b
 — *The Problems of Life and Mind, Second Series: The Physical Basis of Mind*, 1877.
 — *The Problems of Life and Mind, Third Series, vol.1: The Study of Psychology: Its Object, Scope, and Method*, 1879a.
 — *The Problems of Life and Mind, Third Series, vol.2*, 1879b.
 Mill, *The Collected Works of John Stuart Mill*, ed. J.M. Robson, 33 vols, 1963-1991.
 Morgan, C. Lloyd, *The Interpretation of Nature*, 1905.
 — *Spencer's Philosophy of Science*, 1913
 — *Emergent Evolution*, 1927.
 — "Autobiography", in Murchision, Carl, *History of Psychology in Autobiography*, vol. 2, 1932
 Oken, Lorenz, *Grundriss der Naturphilosophie*, 1802.
 Postlethwaite, Diana, *Making It Whole: A Victorian Circle and the Shape of Their World*, 1984.
 Spencer, Herbert, "The Development Hypothesis" (1852a), in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.
 — "Theory of Population", in *Westminster Review*, April 1852b.
 — "Universal Postulate", in *Westminster Review* 60, 1853.
 — "The Genesis of Science" (1854), in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.2*, 1891.
 — *Principles of Psychology*, 1855.
 — "Progress: its low and cause" (1857a), in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.
 — "Transcendental Physiology" (1857b), in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.
 — "The Nebular Hypothesis" (1858) in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.

- *The Man Versus the State*, 1884.
- “Bain on the emotions and the will” (1860) , in *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.1*, 1891.
- *First Principles*, 1862.
- “The Classification of the Sciences” (1864a) , *Essays: Scientific, Political and Speculative, vol.2*, 1891.
- *The Principles of Biology, vol.1*, 1864b.
- “Mill versus Hamilton” (1865) , in *Essays: Scientific, Political, & Speculative, Vol. 2*, 1891
- *First Principles, 2nd. ed.*, 1867a.
- *The Principles of Biology, vol.2*, 1867b.
- *Principles of Psychology, vol.1, 2nd. ed.*, 1870
- *Principles of Psychology, vol.2, 2nd. ed.*, 1872
- *Principles of Ethics, vol.1*, 1896a.
- *Principles of Ethics, vol.2*, 1896b.
- *First Principles 6th. ed.*, 1900.
- *Autobiography vol.1*, 1904a.
- *Autobiography vol.2*, 1904b.
- Stephan, Achim, *Emergenz*, 2005.
- Von Baer, *Über Entwicklungsgeschichte der Thiere*, 1828.

- 1 Alexander, Samuel, *Space, Time, and Deity, Vol.1, Vol.2* 1920. Haldane, John Scott, *Mechanism, Life and Personality*, 1921. Morgan, Lloyd, *Emergent Evolution*, 1923. Broad, Charlie Dumber, *The Mind and Its Place in Nature*, 1925.
- 2 Beckermann, Ansgar et al. (ed.) , *Emergence or Reduction?*, 1992. Blitz, David, *Emergent Evolution: Qualitative Novelty and the Levels of Reality*, 1992. Bedau, Mark A. et al. (ed.) , *Emergence: Contemporary Readings in Philosophy and Science*, 2008. Malaterre, *Les origines de la vie*, 2010. Stephan, Achim, *Emergenz*, 2007.
- 3 森秀樹「〈創発〉概念の起源（3）：初期創発主義における〈創発〉概念」、『兵庫教育大学研究紀要』、54 巻、pp. 63-76、2019、
- 4 森秀樹「心理学における「創発」概念の系譜」、『兵庫教育大学研究紀要』、57 巻、pp.117-127、2020 は心理学の領域におけるスペンサーからルイスへの影響について論じた。ルイスに関する記述については本論文と重複する部分がある。
- 5 チェンバーズはこの本の 1841 年版からフォン・ベアアについて学んだとされる (Gould: 110)。
- 6 フェルフルスト Verhulst (1804-1849) は 1838 年にはロジスティク関数について論考を公表し、環境に余裕がある間は生物は指数関数的に増加するが、環境に余裕がなくなってくると繁殖率が低下するとした。Verhulst, Pierre-François (1838) . “Notice sur la loi que la population poursuit dans son accroissement”.

Correspondance mathématique et physique 10: 113-121.

- 7 「彼 [ベイン] は、学習がでたらめな運動に始まると考えた。快適な結果をもたらす傾向のある活動は反復され、苦痛とか欲求阻止をもたらす活動は反復されないの であるという。そして、特殊な活動型の反復が「習慣」をつくり出す」(トムソン (北村晴朗訳) 『心理学の歴史』 (1969) ,p19f.)。
- 8 本研究は JPS 科研費 19K00005 の助成を受けた。

